

## 《シンポジウム》

### 2020年度シンポジウム司会報告

司会 山田 庄太郎

上述の〈企画の趣旨〉に示されたように、2020年度のシンポジウムにおいては「スコラ学における枢要徳の発展」を課題とし、12世紀の枢要徳理論を経て、トマス、ボナヴェントゥラ、スコトゥスがいかに枢要徳を提え直していったのかを考察することが企図された。

松根伸治氏による第一提題「12世紀の枢要徳論」では、アベラールとソールズベリーのヨハネスの徳論が取り上げられた。両者に共通するのは、キケロなど「異教」の哲学者のテキストを典拠としつつも、諸徳を最終的に愛徳（*caritas*）へと還元する態度である。ここには「異教」的四徳概念にキリスト教的基礎を与えるという、古代の教父たちと共通する問題意識を見てとることができるだろう。しかし、専らキケロに範を求めたアンブロシウスと異なり、アベラールはマクロビウスをも典拠として用いている。周知の通り、マクロビウスは、新プラトン主義的な徳論の観点から、キケロの『スキピオの夢』の注釈を行っており、新プラトン主義的な徳理解が、枢要徳解釈の内に流れ込んでいることを確認することができる。また、徳の結合の原理を愛徳に求めるのは、アウグスティヌスにその淵源を求めることができるだろうが、愛（*amor*）から愛徳へと用語が変化している点は興味深い。

加えて、アベラールとヨハネスは、賢慮（思慮）、正義、勇気、節制の四つの内、賢慮に特権的な地位を与えている。賢慮を諸徳を成り立たしめる「諸徳の根」とみなす点には、知性的徳としての賢慮（思慮 *φρόνησις*）を倫理的諸徳の基礎とみなすアリストテレスの徳理論の影響が見てとれる。とはいえ、アリストテレスは賢慮に特別な地位を与える一方で、枢要徳を構成する四徳を、諸徳の内の特筆すべきものとして分類しているわけではない。またアベラールは『対話』において、「哲学者」の口を借り、

賢慮を、徳にとって必須であるが、それ自体は徳では無いと述べており、知性的徳としての賢慮と、数多の倫理的徳をどのように枢要徳へと還元していくのが、一つの課題として示されているように思われる。

松村良祐氏による第二提題「ボナヴェントゥラにおける枢要徳——『ヘクサエメロン講解』第6, 7講解を中心として」は、ボナヴェントゥラにおけるマクロビウスの徳の階層説の受容と、キリスト教的拡張を明らかにしている。マクロビウスは、徳を「ポリス的」「浄化的」「浄魂的（浄霊的）」「範型的」という四つの段階から捉え、観想的生に対する活動的生の意義を強調する為にポリス的徳を持つ者をも至福に与り得るとする。ボナヴェントゥラは、この徳の四つの階層を踏まえた上で、ポリス的段階における枢要徳を「山のふもと」の段階に喩えており、山頂の浄魂的段階において範型的徳を仰ぎ見る者のみに至福への到達可能性を認める。浄魂的段階へと至るためには、対神徳の注賦を通じ、原罪の結果としての情感の歪みが、神的愛、即ち愛徳によって癒されねばならないのであり、マクロビウスの徳の階層説が枢要徳と対神徳を架橋する鍵概念として用いられていることが示された。一方、枢要徳の結合原理についてボナヴェントゥラは、伝統的なキケロの解釈を採用しており、賢慮の位置づけというアリストテレス受容における課題は共有していないように見受けられる。

桑原直己氏による連動報告「中世における「枢要徳」概念の展開——トマス・アクィナスを中心に——」では、トマスが「アリストテレスに由来する諸概念に依拠して体系化された哲学的人間論の枠組みによって」従来の枢要徳理論を再解釈している様子が明らかにされた。トマスはアリストテレスの徳論を受け、獲得的徳としての枢要徳について「賢慮による諸徳の結合」を説く。しかし、注賦的徳としての対神徳へと射程を伸ばすことによって、枢要徳は「愛徳による諸徳の結合」へと包摂されることになる。広義の愛の内に、情動的意味での愛と愛徳とを弁別し、枢要徳と対神徳とを架橋する議論には、マクロビウスの徳論への言及を含め、12世紀の徳論の継承と13世紀の発展とを見て取ることができるだろう。

一方、小川量子氏による第三提題「スコトゥスにおける枢要徳の再構成と友愛の完全性」では、13世紀末から14世紀初頭に活躍したスコトゥスが、厳密な二分法に基づいて、徳の区分を再整理し独自の拡張を加えていることが明らかにされた。スコトゥスにおいて枢要徳を構成する四つの徳目は論理的二分法の結果導出されるものであり、主意主義の立場から他の諸徳に対する賢慮の優位を認めないという点も相まって、諸徳の結合と

いう論点は認められない。それ故また、枢要徳と対神徳も互いに独立したものとして語られることになる。枢要徳が、またそれを構成する個々の徳目が分節化されて論じられるスコトゥスの徳論は、近代の徳論を準備するものであったと言えるように思われる。

またスコトゥスの内に、「ポリシ的」徳を通じ、観想的生に対する活動的生の復権を試みたマクロビウスと共通するものを見てとろうとするのは読み込み過ぎであろうか。

本シンポジウムを通じ、12-13世紀のスコラ学において、愛徳を通じ枢要徳と対神徳を包摂し得る徳の結合理論が模索されていたこと、またその一方でスコトゥスにおいて徳の結合という視点が放棄され、新たな方向性が提示されたことが示された。これを受け、フロアからは個々の思想家の獲得的徳と注賦的徳との関係や、諸徳の中で伝統的な四徳を「枢要」な徳と位置付ける論拠、また、徳と教育との関連や現代の徳倫理に対する意義など相次いで質問がなされ、活発な議論が行われた。